道と跡

文明書

はしがき

道を求むる若き僧が、戀に惑ひ、利に醉ひ、名に渇き、位に儀にし悶にの跡、世に示すも耻かしや。おのが汚れの悶にの跡を世に公にするさに迷へる業なるかな。

死の國にとわにつきせぬ生を得たりわれ救はんのほとけたのみて

明治三十六年初夏　　非無生識

目次

詩神……一
我を殺せ國を燒け……一〇
刼火焰……一三
綠樹の蔭にて……一八
朝菫と夕顏と……二三
さらば……二五
鳥と魚と……二八
暮の思……二九
月に向ひて……三〇
魚釣る人と語る……三二
白き雌鳩に代りて……三四
世の驚き……四〇
群を離れて只ひとり……四二

野に茶の花を折りて室に愛す……四四
土井晩翠に贈る歌……四六
一葉……五二
蛙穴に入る……五三
冬の野路に野菊を見て歌へる詩……五四
二度栗山……五七
麥田の畦に……五九
村に入り……六〇
裸馬に……六一
理想は高き……六四
醉歌行……六六
雀蛤となる……七〇
木兎の聲……七二
從弟順證の靈を祭る……七八
風と波……八二
躓く我……八五

微笑……八八
秋蝶を葬る歌……九〇
車夫問答……九八
盆踊……一〇八
逍遙……一一一
蕎麥打……一一六
谿聲清韻……一二三
小春の村……一三三
右手には……一三七
釘の音……一三八
宿屋の娘……一四三
西の京の友に……一四七
死の神來れ……一四九
金陵の舜水に寄す歌……一五一
我と我歌……一五七
秋の日……一五八

草の生命……一五九
旅の一夜……一六〇
親鸞聖人の誕生……一六二
歌はつかしき……一六九
詩人……一七〇
友情……一七二
冬の夜天王寺の墓地をさまよひて……一七四
若き姉妹に……一七九
我に罪惡の自覺なし何ぞ佛の救濟を求めんやと云へる人に贈る……一八五
野鼠に與ふる歌……一八六
常住の光……一八九
詩のわづらひ……一九一
自然……一九五
光明攝取……二〇三
生命……二〇八

歡喜……二一〇
盲女の歌……二一二
自由、平等……二二四
人生……二三〇
藍巷の夕陽にうたへる歌……二五六

挿繪

春夏秋冬四葉……下村爲山

迷の跡／

福陽文庫

詩神

戀に湧く血を歌ふをのみ詩と云はゝ
われ寧ろ欲す詩のなからんを。
花を惜み泣くをのみ詩人の常と云はゝ
われ肯んぜんや詩人たるの稱。

曉鳥敏著

巧言必らず禮なりと云ふ可らず、
美辭悉く詩ならず。
令色必ず仁なりと云ふ可らず、
虚飾は詩神の嫌ふ所。
木猴の冠したるこれ詩の敵。

怒れるを詩と云ふか、
あらず、これ焔々たる夜叉の息。
妬めるを詩と云ふか、
あらず、これ婉〻たる毒蛇の鱗。
嘲けるを詩と云ふか
あらず、これ囚徒をつなぐ鐵鎖の音。

詩神名は想像、人心の奥秘に生れ、
時に星の如く天に輝き、
時に雲の如く空を翱り、
時に水の如く地に隱れ、
時に鳥の如く森に囀り、
時に魚の如く海に泳ぐ。

身を詩神の羽に托すれば
一蓑一笠の僧忽ちに
王公となりて玉殿に住み、
美食に飽きて妙樂に和し、
錦着る人其儘に

賤民となりて橋下に眠り
寒風に着たる蓆を吹かる。

春、紫のつぼ菫
その花に座して密に醉ひ、
夏、夕立の晴れし庭
青葉に置ける露に隱れ、
秋、紅の葉をしきて
澄める水底の石に坐し、
冬、白雪の背に乘りて
枯木の枝に花飾る。
詩神奇なるかな、無象の翼。

詩神妙なるかな、自由の力。

食はされは餓に、着されは凍ゆ、
若き遂に老い、生あれば死あり、
貧者は日ねもす塵にまみれ、
富者は夜すがら錦着る。
空かけらんに鳥の羽なく
天に遊はんに雲のつぼさなし、
かくてなほ自由あらんや、この肉團。

想像は生命、自由の母。
詩神飄忽として降る時

思ふて能はさる事あらず。
肉團を詩神に捧くる者、これ詩人。
自由の鍵を手にして雲に乘り
六合を家とする者、これ詩の子。

殺さるゝ者、殺す者、
盜まるゝ者、盜む者、
惡まるゝ者、惡む者、
妬まるゝ者、妬む者、
一視す、詩神平等の眼。

謗られて怒る者、

惡まれて怨む者、
何ぞ許さんや、詩神の子。

淨穢不二、美醜一如、
これ宗教の佛、尊き所、
美に着するは詩神の愛、
淨に執するは詩神の眞實。

詩を讀んで、悟らずと云ふ友あはれなり。
青葉の蔭に日光を望む時
荒海の底に眞珠を探る時
詩あり、詩は迷悟の境にて、

川海に注ぐ所、詩神の殿。
詩神元と佛、凡夫迷情の衣着たり。

黄金を顧ず、位に媚びず、
時に世人に狂と呼ばる。
善惡の繩に縛られず、
世人時に下す、不德の名。
花捨てかぬる蝶のごと
美の密藥に執着す、
至人は云ふ迷へる者と。
かくて詩人は誤らる。

山に登らんとして足弱み、
聖を望みて得ざる時、
產の氣つきて詩人生れぬ。
絹の肌、櫻の顏
天かける翼に薔薇の香あり、
例へんか兆殿司の筆、觀世音、
池の面の凉風にゆられつゝ
玉の腕を枕して
まどろむよ、蓮の一葉の上に。

*　*　*　*

我を殺せ國を燒け

我を殺せ、國を亡ぼせ、
婆羅門の神涇婆(しば)よ、靈あらば、
汝一閃の眼光の火、
慾より成りしこの六合を燒き盡せ。

功名よ、利達よ、苦の種つきぬ、
人類を殺戮し盡せ、マーラーカーラよ、
その頭骨に頸飾らずや。

學校よ、軍艦よ、戰爭つきぬ、

國土燒け、燃(も)やせ、アナラよハラよ
ろの灰燼に身をあたゝめずや。

バールバチの愛に迷へる
我をば殺せ、世を燒きはらへ。
その三叉にカーマーデバを刺さずや、
その弓に日月射ずや。

小なるこの身、殺されんによし。
汚れしこの世、燒かれて足れり。
トルガ來れ、カーリー起つて、
笑ふて死なん、この胸を刺せ、

喜ひ燃にん、この世火にせよ。

我、我を知れり、而うじて
我、我を刺さんとせし幾そたび、
而も、ろの劒なきを嘆じぬ。
我、我が世を知れり、而うして
我、我が世を燒かんとせし幾そたび、
而も、その火なきを憂えぬ。

恰もよし、汝、黑面の神、淫婆、
額に新月、頸に毒蛇、
三叉かざせよ、金剛ふるへ、

その三つの眼に火の矢射よ。

あゝ汝、我力、汝、我光、
殺戮者、破壞者、刧火の主
火神、バイラーバー、
我には惠み垂れしよな。

* *

*

*

刧火焰

圓渾恆にめぐれども
極星いつも北に見ゆ、

かの星辰は動けども
天にかはらぬ心あり。

水六合にみなぎりて
生命を奪ひ去らんとき、
碎くる波に明星の
かげちら〳〵と宿るなり。

風八表に塵吹きて
四海黄色に染むるとき、
灘、千仞のその底に
眞珠の玉ゐ輝ける。

刧火、地軸を燒き盡し
天柱灰となさんとき、
あゝ焦熱のろの焔火
人の心に燃ゆるとき。

涼風吹いて八紘に
蘇生のいぶきを勳せしめ、
清水流れて玄々に
力の草を芽ばえしむ。

山、ヒマラヤの雲黑く、
川、アマゾンの水濁り、

南、印度洋沙魚をどり
北、カンサツカ熊うなる。

ラインの水の行くところ
瀧、ナイヤガラ落つところ
さぎりは深く岸を罩め、
しぶきは厚く谷閉づる。

あゝ青春の氣はつきて
三千世界秋たけぬ、
見よ恒星の輝るところ
ネブユラの雲はかゝらずや。

因陀羅烏舍師を檎にし
セータンこの世にあれまはる。
あはれ富士の峯、琵琶の湖、
提婆の足を仰がずや。

かぐやは竹に宿りけり、
三保に天女は舞ふたりき、
閻浮檀金肌清き
人降らずや大日本。

*　*　*

綠樹の蔭にて

雨はれて
みとりの野邊に
虹霓はかゝれり。
雲のかいま
青きみ空ゆ
落紅を吊ふ若葉
あまつ日のさかにを光る。

東したゝる
楓の梢

鶺目白鳥
樂しげにこをどりしつゝ
歌ひあひけり
行春の幸祝ふ歌。

榮にには盃をあげ、
衰へにあざけりをなし、
會へは歌ひ、
別れては泣く、
生るれはことほぎ、
死すれはなげく、
かくて世に大波小波、

あゝ人、我等は似たり、一葉舟。

曉、雲の白きころ
かの菩提樹の下にして
無象のつばさ、無限の光、
眞理に入りしシッタルタ、
變る世に
樂しむみ法(のり)
をごそかに、うるはしく
とけり、二千五百年の昔、
「生あれは死あり
こゝに死し、かしこに生る」。

見ずや、
春風に咲き出てし花、
樂しけに春風に散る、
花は憂へず、
惑へる人は之に泣く、
而して若葉彼に示す、
「愚よ、我、花のこゝろをくみて
喜びと、榮にをこゝに飾る」。

きかずや。
桃、櫻、五形、菫、
くさ〳〵の花をかざしつ

うす絹の霞の衣身にまとひ
黒き冬のとばりを出てし
春の女神、
をぼろげの夢にあき
綠玉を彩る綾の
寢まきをつけて
うれしげに眠に入れり。
春は嘆かず、
惑へる人は之を惜む。
而して小鳥彼に語る、
「愚よ我、春のなさけを知りて
樂みと、光りをこゝに歌ふ」。

* * *

朝顔と夕顔（ムーンフラワー）と

今宵ぞ月をわがまんと
咲くは朝顔の希望（のぞみ）なりき、
されど眞晝の風むごく
凋むはかれの常なりき。

明日こそ旭わがまんと
夕顔の希望かたかりき、
されど夜中の風つらく

凋むはかれの常なりき。

百度朝顔咲きしかど
終に月をば見ざりけり。
されども月は宵毎に
露の乳をは飲ましけり。

千度夕顔咲きしかど
終に旭に逢はざりき、
されど旭は晝毎に
光りの胸にあたゝめぬ。

*

*

*

*

さらば

惡きを誹る世よさらば、
愚あなどる人さらば、
善きをば嫉む人さらば、
賢き嫌ふ人さらば。

醜き捨つる世よさらば、
僞り惡む人さらば、
ミユズ祭らぬ世よさらば、
まことさげしむ人さらば。

恐るゝ思あゝさらば、
疑ふ心あゝさらば、
やれたる靴よいざさらば、
汚れし衣よいざさらば。

さらばさらばよいざさらば、
捨てんか狹き人の國、
行かんか廣き親の家、
夕陽の雲をしるべにて。

靴はわがため造られぬ、
衣も新たに縫はれけり、

うれしやわれにみ親あり。

甘きは母の乳房にて、
抱かるゝみ手の柔きかな、
佛は慈悲の御親なり。

* *

*

*

鳥と魚と

空とぶ鳥の嘆ずらく、
魚は自由の身なるかな、
水底泳く鰭もてり、

あゝ幸なきや、わが運命。

水ゆく魚の嘆ずらく、
鳥は自由の身なるかな、
大空翔る翼あり、
あゝ幸なきや、わが運命。

かくして鳥は悲みぬ。
かくして魚は悶えけり。
はかなきものは運命かな、
自由はわれにそはぬよと。

*　*

*

*

暮の思

貴きかなや西の空、
妙なるかなや暮の色、
菫の花に染めし雲、
春の御國の幕なれや。

あゝ御佛のたてましゝ、
榮えの國はこゝなれや、
日の行き月の落つ所、
あまたの星の眠る家。

あゝうれしやな露の身の、
消ゆと思ひし迷へりき。
つきぬ生命の乳に飽き、
いでさすらはむ花の園。

＊　＊

月に對ひて

われ松蔭に佇めば
月かゝりけり松の枝。
われ磯近くさすらへば
月かゝりけり波の上。

＊

＊

われ悲に沈むとき
月は涙にむせぶなり、
われ喜におどるとき
月は榮を光るなり。

あゝ高いかな、月の影。
あな貴しや、夜の佛。
葉末の露に似たる身に
眞珠の如く宿ります。

畫くにふさふ筆あらず、
歌ふにふさふ聲あらず、

たゝ額つきておがまばや
光湧き出る慈悲の玉。

＊　＊　＊　＊

魚釣る人と語る

（監獄を見ての歸るさに）

かれ
風なき川の雨の暮
葦間に舟を横たゝて
魚約る人とならばやな、
暫し浮世を逃れつゝ。

われ
こゝに嫉みはあらざりき、
夕べ樂しき水の世や、
魚は自由の鰭を得て
佛の慈悲を舞へるかな。

かれ
あゝ釣竿のしほるとき
魚は潑ねるよ。我胸に
樂み涌かん、あはれとか、
魚は慾ゆへ身を果てぬ。

われ

誰か與へたる慾の因
われ氣弱くて涙あり
犯せる罪に同胞の
苦む見るに忍びんや。

* * * *

白き雌鳩に代りて

獨り淋しき巣の内に
夕べの思堪えがたな、
白き雌鳩は羽すぼめ

悲しき聲に憂さを泣く。

甘きは花の蕋のごと
ふりわけ髪のつゝるゝ、
親みそめし語らひは
夢か、思へば涙のみ。

雄鳩の羽は紺の色、
その艶あるは愛なりき、
その失れるは望みなりき、
その強かりしは力なりき。

その夜ろの時、わゝ恐れ、
思ふも身の毛いよだつよ。
貂か鼬鼠かわかざりき、
樂しき巣をは襲ひ來ぬ。

その驚きに氣は失せぬ。
ろの氣歸りし時は遲し。
朝、旭はのぼりけり、
されど我世は闇となりぬ。

共に遊ひし寺の棟、
愛を語りし宮の椽、

あゝ樂かりき、さは云へど、
今はた悲し、獨よな。

宣ふか、夫を重ねと、
きくもうるさし、うれたきや。
我等の戀は、心なりき、
肉盡きて盡きぬ魂なりき。

我夫失せぬ肉失せぬ、
されど我が心に浮ぶみすかたは
など消ゆらんや我が愛は
天地と共に盡きざらむ。

重婚は西洋の道ときく
されど我がまことの愛は
夫死して滅ぶべきかは
思は日々に増してこそゆけ。

宣ふか、我やつれしと、
さもあらん我れ　世に活きて
何樂まむ、我希望、
我光明か、あゝ我生命
夫逝きぬ、われ逝かんかな。

我夫のわれを思ふ愛は

み佛の心の内に光り放てり。
この愛にたよりてのみぞ
やつれても我れ世にあらむ。

豆拾ふ朝の庭つらく
空行く晝の羽重し、
白衣の艶やうせにけむ、
生れて衣は白かりき。

この白き衣ついに我が
夫を葬る運命かや。
運命は佛の御手ときく

さればなげくも迷かや。

*　*

世の驚き

思は若き綠木に
甘き戀路を歌ひあふ
小鳥の春の面白や。

されどこは夢、この夢を
さます鳥さし心なや。

*

*

兄のけをひを妹の
追ふて繁れる夏草の
榮ゑの夢の樂しやな。

されどこの夢牧童の
鋭き鎌に驚かむ。

珊瑚に宿り眞珠貝
枕に眠る魚の幸
昆布に潑ぬる嬉しさよ。

されど悲しき網の目や

明日市に出て骸賣る。

戀よ、睦みよ、はた財よ、
秀才の希望遠くして
醉ふて舞ふ日の心ちよや。

されど若者知るや否
ビールさめ易き北の風。

*　*

群を離れてたゞひとり

*　*

その實の赤き戀ひそめて
雀茨の株に鳴く、
刈田に落穗あらそへる
群を離れてたゞひとり。

かのむらさきの色慕ひ
若者菫の密を吸ふ、
算盤おがむ利の人の
群を離れてたゞひとり。

かの實の白き戀ひそめて
四十雀南天の枝に鳴く、

藪に小蟲をあらそへる
群を離れてたゞひとり。

かの鶴の羽の雲慕ひ
修行者土に膝まつく、
水月欲ふ名の人の
群を離れてたゞひとり。

* * *

野に茶の花を折りて室に愛す

紅緑の春天に徂き、

青精の夏地に眠る、
寂莫の秋情ありや、
茶の色さびて匂ひあり。
譬へんか夕ぐれの烟
女二十五襟白し。

手折りしは戀か、
許せ、われ溺れぬ。
この清き花いづくんぞ
狐の友と捨て得んや。

小牛の聲にあくる朝

樂しかりしと泣くを止めよ。
誦經にあけて琴にくるゝ
洞に馴れてむわれ着者。
見すや汝にそふ寥の花、
わが血流れて莖に燃ゆ。

* * * *

土井晩翠に贈る歌

君に少陵の詩はあれと、
我に子建の筆あらす。
君に楊雄の賦はあれど

我に工部の才あらす。
君シルレルの想あれど
我カライルの識あらず。

君をみ空の雲とせば
我は下行く川の水、
君我が歌を知らねども、
我常に讀む君か歌。
君よしばらく氣をとめて
早瀬の音をきゝねかし。

自然を君に譬ふれは、

君か調は春の日の
霞める花にあらすして
松影黑き秋の月、
君ゲーテの戀なきも
かのバアンスの誠あり。

造化を君に喩ふれば、
君が巧みは光信の
精しき繪にはあらすして、
探幽齋の强き筆、
君テニスンの華なきも
かのユーゴーの勇(いさみ)あり。

君が歌には三絃の
艶なる聲はあらねとも
ゆかしき琴の音はなきも
けたかき琵琶の響あり。

鴉の聲に似たる歌、
鸚鵡の如き歌人の
中にやさしき鶯の
梅に鳴く音は藤村か、
空渡り鳴く雁の音は
君晩翠の調かや。
されこ共君よ心して

早く九皐の鶴となれ。

君バイロンの熱はなく、
ヲルヅヲルスの靜あらす、
そもダンテの慨ありや、
かのミルトンの信ありや。

無始より無終の洞遠く
無限の絲の張られたる、
時の琴をば彈ずべく
君はいかなる爪を持つ。

見渡す限り極みなき
無限に廣き白絹の
空の書幀に書くべく
君はいかなる繪をや知る。

かのノールスの瑟ならで
君彈きならせ大和琴
かのラッフエルの筆ならで
君かき習へ兆殿司。

君希くは其歌を
明石の宮に棒けてん、

して緊那羅に問へよかし
ミュズの神を後にして。

＊　＊　＊

一葉

一葉をさろふ風吹けば
庭にバッサリ桐の葉の
落つよと見れは魂ぬけて
天つ御國に遊ぶらし。

清けく澄める秋の空

白きは鶴に譬ふべき
うすきは絹に比ぶべき
小さき雲の高く舞ふ。

＊　＊　＊

蛇穴に入る

希望の光照る時は
闇路も安く過ぎぬべし。
花の薫りを夢みつゝ
木の葉を散らし草枯らす
わびしき秋の風厭ひ

靜に春を待たんとて
蛇石垣の穴に入る、
龍華三會を待つに似て。

＊　＊

冬の野路に野菊を見てうたへる詩

草皆枯れて霙ふる
野路に牧者の鎌逃れ
世を洞觀の氣も見えて
一本野菊物思ふ。

薄紫の色褪せて
憂いに老いし姿見ば
婿に先たゝれ子に別れ
泣いて年經し婦に似たり。

破壞の神に呪はれて
葉は落ち莖は赤らみぬ。
さど花のみは衰へず
寒さにかちてほゝゑむよ。

人の快樂の夢覺めて
髮は乱れぬ頰は痩せぬ

さど胸に湧く愛の湯は
雪の世に堪にあたゝかき。

さな恨みぞや心なき、
旅人汝をふんで行く。
さな憂にじな寒風に
獨淋しく吹かるゝを。

自然の柔手(やわて)あたゝかく
冬日の光りあらすやは、
急く野の路汝見惚れ
佇む詩人あらずやは。

地の泰平を奪はれし
花天上の星戀うる、
その花めでゝ紅涙に
詩(うた)かく詩人ありとかや。

*　*　*

二度栗山

二度栗山に入るところ、
李の下に茶店あり。
樽に生けたる木蓮や、
手拭ふいて東風(ちち)をどる。

少女十三洗ひ髪、
甘酒ありとわれをよぶ。
春、桃咲かずとするえんや、
低唱やめてやすらへり。

あゝ世の旅の泥深み
歩むに倦んじ溜息の
われを招くよむらさきの
雲間のみ親なつかしや。

愛の李の香に醉ひて
けたかきみ名を吟ず時

慈悲あたゝかき甘酒に
快樂の思ひ湧かざらむや。

* *

麥田の畦に

麥田の畦にわれたちて
桃の村への道を問ふ。
答ふるは誰ぞ聲かすむ、
白手拭や村少女
姉と妹よゑみてたつ。

*

*

われ罪惡の野に迷ひ
花の御國の道とへば
觀音勢至手をとりて
空行く雲にのせたまふ。
御親は愛のまなこもて
われみそなはす招きかな。

*　*

村に入り

村に入り藪の小家に
雛祭り見る桃の下、

*

*

機のねやんで煤窓に
をこるよ若き話し聲。

日あたる軒に雞鳴て
自然の子われ身を忘れ、
得たる詩の句に手をうては
雛笑(ひいな)ひぬ我默す。

*　*

裸馬に

裸馬に乘る村男

*

*

ろのほうかむり泥の道、
麥の葉を吹く春風に
畑打つ少女胸をどる。

畑の土に似たる世の
業にたづそふわれつたな、
自然の親のみすがたに
など歡興のなからんや。

銀鞍おかず顔黑き
飾らぬ自然の若者に
ひそかに耻ちぬわれ弱く

虛飾に心とらるゝを。

自然はこよなき力なり
よく一切を動かさむ、
これに從ひ活くるとき、
など修飾を要せんや。

自然に心まかすとき
自然の力われにあり、
かくてけがれは洗はれて
淨土は胸にたてられむ。

*
*
*
*

理想は高き

理想は高き蒼空に
くしき音をなく揚雲雀、
その天したふ聲きけは
われ土を去る思ひ哉。

霞の上に隠れたる
小さき天の樂師汝
雲間の雲雀矢の如く
麥田に降る何ことぞ。

み座はたかき自然の
めぐみの父よ愛重く
けがれの畑に餌を泣く
この子はぐくむそゞろなや。

力なき身は藁の巣に
蒼空かけるつばさなき、
この子の口にふきいるゝ
天のいぶきのたふとしや。

*　*　*

醉歌行

鐵もたゝなん鋭刀も
戀故にこそ鈍りたれ。
鍛ひあげたる筋腕も
酒ゆへにこそ狂ひけれ。

山をも拔かんその力
少女故にぞ弱りたる、
星をも蹶らんその勇み
葡萄の薫に醉はんとす。

諾のみ神は冊を戀ひ
頂羽も虞故に涙あり、
地獄めぐりし詩人も
ビアトリチエに身を捧ぐ。

小春治兵衛のために死し、
忠兵衛梅川のために果つ、
子をも夫をも世のすべて
たさるは捨てぬ權三故。

あゝ戀故に葡萄故
人は自然に溺れけり。

あゝ女故男故
人渾沌に還りけり。

飲んで其角を慕はんか、
醉ふて李白を學ばんか、
狂ふてゲーテ習はんか、
怒りてバイロン追はんかな。

星を慕ふて涙ぐむ
菫の戀を學ばんか、
蝶にあこがれほゝゑめる
五形の思ひ習はんか。

醉ひたる人の眼(まなこ)には
浮世は酒の泉にて
戀する人の心には
萬有は愛に溺るるなり。

あゝ戀故に葡萄故
人は天女と共に舞ひ、
あゝ女故、男故
人はミュズと歌ふなり。

*
*
*

雀蛤となる

稲を盗みつ種子食ひし
罪重けれは海に落ち
藻屑となりて消ゆと云ひ、

羽弱ければ荒れすさぶ
木枯寒み力なく
濱邊に果つと或は云ひ、

あらぬ思を運らしつ
誹謗の牙を鳴らすなり、

心のまことと知りもせて。

草木を枯らす毒の蟲
拾ひ盡して心よく
雀蛤に身をかへつ、

夕べ朝たにみ佛の
國を吹きつゝ日を送る
世の太平を祝ひつゝ。

*
*
*

木兎の聲

墨の衣につゝみたる
赤き迷ひを觀しつゝ、
眼は半開の趺坐の夜々
更けて木兎鳴く庭の松。

悲しき聲を譬ふれば
子を捕られたる獺の
その子たづねて村近く
里川つたひ冴ゆる夜を
更けて叫ぶに似たる哉。

憂うる聲を譬ふれば
矢傷をおひし猪の
狩屋の草に血をなめて
うなり泣く音に似たるかな。

狂へる聲を譬ふれば
命捧けて慕ひたる
夫遠征の打死を
遺髪抱きて泣きまろぶ
少女の聲に似たるかな。

澁茶に佛語りあふ

朝村人の嘆すらく
あゝ過ぎし晝木兎二つ
藪の榎に眠りしを、
人戯むれの銃丸に
雄鳥はかなく地に落ちぬ。
雌は驚きて寺の森
さして飛びけり物うげに。

この物語りきゝしとき
われ手を拱んでうつむきぬ。
人笑はれの弱きわれ、
など愁嘆の湧かざらむ。

その戯れに生木割く
若者何ぞ氣強きや、
汝がこがれたるおとめ子の
人に歸ぎし時にすら
その人怨み宵々を
野道に泣きし忘れしや。

脹れし眼蓋をおさへたる
その手に銃を握りしや、
あゝ戀知れる人の子の。
などかくまでに情なきや。

あゝ人の世の春ゆたか、
草に眠れる蝶の夢
覺ます銃音なからずや。

世の義理てふを譬ふれば
一つ血通ふ生木切る
鋭き鎌に似たるかな。

人の智恵てう譬ふれば
木兎の雄撃ちし若者の
狽ひの眼にも似たるかな。

木枯星を吹き落す
寒き松が枝血にむせび
七夜泣きにし木兎つゐに
泣かずなりにき果いかに。

世の薄情を泣き泣きて
紅涙絶にし詩人の
靜に眠る墓の上に
このごろ木兎の夜鳴くとか。

*　*　*

*

從弟順證が靈を祭る

あゝ祝はんか、いたまんか、
障の雲の　常闇の
浮世を厭ひ　君は今
光の國に　旅立てり。

あゝ泣くべきか、笑むべきか、
罪にけがれし　池水の
泥をはかなみ　君は今
天つ御空に　登りゆく。

我は泣かじよ　君がため、
君去りて後　君が父
日々に面和の　ほそりゆく
根なし草にも似たる哉。

我は嘆かじ　君がため、
君に一人の　弟あり
看病(みとり)につかれ　君惜み
君が病の　後を追ふ。

我悲まじ　君が爲め、
君も愛でにし　世の人の

塵のちまたにふみ迷ひ
杖失へる　聲あはれ。

我は弱らじ　君か爲め、
我が浮世の波越る
船と頼みし君くだけ
共に沈まん思あり。

君は清水よみ佛の
慈悲(めぐみ)の海に注き入る
あつさにかわく旅人の
嘆きありとは知るや君。

君が姿は朝露と
消えてはかなくなりぬれど
君が心は世を照し
君がみ魂は世に語る

悲しからずや今の我、
樂しからずや君の今、
やつるゝ我を君はしも
をかしとこそは思ふらめ。

*　*　*　*

風と波と

旋風怒濤の夜、日本海岸に立ちて東洋問題を考へ、
我國の前途を憂ひてこの歌をつくる。

北カンサツカ波高く
西サイベリヤ風荒し。

北斗を散らす朔風は
降りて日本海を吹き。

時に火焔の立山に
煙と灰の霧起し、

時に雪積む白山に
雷神宿る雲湧かす。

雲青冥にはびこりて
照る日の影を蓋はんとし、

霧大空にむらがりて
月の光を包むなり。

怒濤澎湃泡たて、
渦き來る黒潮は

時に萬重の山となり、
時に千仞の谷をなし、

佐渡を呑まんとはやりつゝ
能登を烈くべく荒れまはる。

寒けき波のうつ處
天柱折るゝけはひあり。

鋭き潮のつく處
地軸碎くる響あり。

風、水底の岩を吹き、
潮、蒼穹の星を打つ。

風潮、呑噬(どんぜい)の暗送り
雲霧、平和の光蓋ふ。

*　*

躓く我

*

*

かわゆき蝶の後追ひて
泥田にころぶわが身かな。

我に血のある何むくゐ、
戀知りそめし何の罪
寧ろ彼女のなかりせば
あゝこの憂いあるべきや。

清けき星の影のゐみ
石に躓く我身かな。

生れて文字知る何の刑、
經誦し覺ゆ何の罰、
寧ろ理想のなかりせば
あゝこの悶あるべきや。

愛の堅まり宿したる
耻らふ少女ゆかしやな、
かの若者にいたはられ
その溜息に慰むよ。

憂ひ生命の憂の子、
憂ひ離れて生くべきや。
悶え力の悶の子
悶え離れて死なずやは。

轉びて泥に膝つけば
ろの田の畔に菫咲き、

蝶こゝに來て眠れるよ、
わが痩せし手の觸るゝ儘。

躓き草にはらばへば
その草の上に露光り、
その白露に星住めり、
わが唇に吸はるべく。

＊　＊

＊

＊

微笑

花咲くゆへを問ふな君、

そゞろほゝえむわれを見て
少女も笑みぬあどけなく、
白百合風に靡くごと。

嫉みの友のからかひに
われは嬉しく笑ひけり。
されど少女はうつむきぬ、
その白リボンれのゝきて。

笑みたる二人譯知らず、
自然の親のまけのまゝ。
白薔薇星にほゝにめば

星白薔薇にさゝやくよ。

*　*　*　*

秋蝶を葬る歌

秋蝶一つ翩々として我袖にまつはり來る、其さまいとかはゆらしく、しばし見とれてありしが、いかにやしけむ、我杖をあけて彼を打ちしかは、折あしく彼にいたく中りて、彼終にみまかりぬ。あまりの悲しさに一首の歌を作る。

夫に後れし秋の蝶
痩せし姿のものうげに
薄紫の羽重く

わが行く袖にまとひ來ぬ。
あはれと我は思ひしが
やさしと暫し見とれしが
いかに心の狂ひけむ
杖もて彼を打ちにけり。

我一撃に羽裂けて
蝶は落ちけり橋の上、
心は既にさめつれど
時早遅し憂れたきや。

悲しきかなやいたましや、
いだきれこしていたはれば、
身をふるはしてもだにつゝ
終に殼とぞなりにけり。

如何なる罪を犯してか
彼は杖もて打たれたる、
かよはき羽は罪なるか、
やさしき色は罪なるか、
我慕ひしが罪なるか、
あらず皆これなさけなり。

何を惡みて我はしも
彼が命を奪ひたる、
痩せしを我は嫌ひてか、
なよかを我はねたみてか、
あらず皆これほまれなり、
我は彼をば愛でたりぬ。

なさけほまれの身にしみて
愛てにし彼を殺せしは
正しき我の心かや、
罪なき彼の生命をば
奪ひし罪は我にあり。

我は確に狂ひたり、
常の心にあらされば。

彼か最後の風寒く
狂ひし心覺めぬれば、
悔と恐と悲しみに
胸に血は湧き身は慄へ
赤き涙をなき殼に
注きてこそは泣きにけれ。

かくて果てしのあらされば
涙にぬれし紙をもて

魂なき蝶を包みつゝ
靜に橋の袂なる
野菊の下に葬りつ、
泣きつゝ次の歌たむけ
念佛稱へて歸りにき。

「夫に後れてやつれてし、
汝は憐れの者なりき。
我行く袖にまつはりし
汝はかわゆき者なりき。」

「憐れの汝を苦しめつ

かわゆき汝を殺したる、
我は鬼とも又魔とも
見るべきものよ恐ろしき。」

「ほまれある身の徒らに
冷たき風に吹かれつゝ
むごき終りを遂げぬるは
慨(がい)ある人の運命にて、
理(ことわり)なくて罪なきを
苦しき谷に追ひやりつ
心よしとてほゝゑむは
浮世の人の習なり。」

「かゝるうれたき水の瀬に
汝もはかなく溺れけり。
されば共汝よ怨まざれ
われ世の人に異りて
ものゝあわれは深く知る。」

「愛に溺れて氣は狂ひ
つれなき業をなしつれど、
われに涙と悔あれば
ろを華と見て安らけく、
汝か亡き夫の遊ひ居る
春の御園に行けよかし。」

「顧ふに我も遠からず
ねたみそしりの牙鳴らす
羅刹に似たる世の人が
惡みの杖に打たれてぞ
身をばこの世に見捨てなむ、
汝が運命の後追ひて。」

* *

*

*

車夫問答

引

寂莫を形身に置きて
紫の雲のみ國に
秋の日は樂しく行きぬ。

冷たき暮の風吹けば
柳こぼるゝ橋の詰
塒に歸る鳥をあふぎ
淋しく語る二人あり。

一人は春の若者よ、
之に對ふは秋の人、
若者は樂しく笑ひ、
老いたるはうれしく語る。

若者

我親貧しく、我に字を敎えず、
學を知らざれば、書もよまず、
先生と云はれて、腦を鬻ぎ
白墨に口を濡らす由を知らず。

されと我に健脚を與へぬ、
かくて我、天下の爲に走り、
世に汗を賣つて
漸く人と交りす。

足を賣るもの賤しからば

腦を鬻くものこれいかに。
學を敎ふるは天下の爲ならば
車を運ぶ世のためならずや。

樂しからずや、今日の我。
朝に霜を踏み走り
夕に星を追ふて行く
人を詐るすべも知らで。

老者

あゝ青春のそのむかし、
望みは鷲の羽に似たり、

白き霞のうす絹に、
抱かれし柳今枯れぬ。

尾花の如く老し母、
野菊の如くふけし妻、
泣く兒の蟬に似たるあれば
遊ふ子の蛾に似たるあり。

竿持ちて蜻蛉つる男兒
秋海棠に似たるかな。
草花つんで歌ふ娘兒は
桔梗の花にさも似たり。

されどわが、細きこの脚
日に焼けしこの赤き腕に、
七人の家内生命あり。
佛、我に財を與へず、
されどうれしや壯健を惠み給ふ。

終日走りて米の金を得ず
金星西に傾く夜半まで、
働いて漸く家に歸れば
妻粥の湯を煮て待てり。

思へば夢よ若かりし、

親が授けし財はありき。
あゝ我れ愚なりし、淺ましかりき。
貧は運命か。一度は
變りし世をはかなみしも愚なりき。
佛は我に貧を與へぬ
されど詐りを敎へ給はざりき。

若者

我に世を欺くの才なし、
商となりて萬金を積み、
高樓に獸慾を逞ふするに適せず。
而も我この人をのせて

走るよ、これはかなきか。
働けば食ひ、働かざれば食はず、
砂を走り、草に座す、
されど我に、
紳士の胸に蟠る
自ら責むる苦みはなく
世をば疑ふ恐怖はあらず。

感謝す、御佛
我にこの安慰を與へぬ。
蓮華にれける露のごと

輕き身體を我に授けぬ。

老者

生命長ければ恥多し、
これことわりか、われ知らず。
梶棒持つを耻と云ふか、
われにこの耻ありて
所謂天下の紳士、
わが車に乘り
揚々肩に風切る人の
胸にひろめる耻なきを喜ぶ。

妻と子の身を飾るべき
綾羅はあらずさは云へど、
わが妻に嫉妬を與へず、
わが兒に怨恨を授けず、
われ家にありて安く
彼等われと共にありて樂しむ。

樂しからずや四疊半、
こゝに喜びの泉湧き、
こゝに望みの光あり、
佛は常にこゝに來て
我等を守りましませば

苦みの谷、悲みの淵
そは昔の夢なるよ。

*　*

盆踊

松の青葉につるしたる
紅提灯のおぼろなや、
三味の音ゆかし太鼓よし、
赤い襷と手を引いて
踊る浴衣よ寺の庭。

*

*

*

春の少女は夏を追ひ、
夏の若者秋を追ひ、
秋の媼の冬を追ひ、
冬の翁の春を追ふ、
この世踊りの輪に似たり。

憂ひ喜びの後を追ひ、
喜び憂ゐの後を追ひ、
榮え衰ろへの後を追ひ、
衰ろへ榮えの後を追ふ、
この世踊りの輪に似たり。

この世踊りに譬ふれば、
われ踊子に似たらずや。
南に進み北に向き
袖東(ひんがし)に西に振り
踊る樂しや、歌につれ。

村に白髪(が)の翁あり、
とはに若やぐ聲の色、
歌の調べの妙なりや、
踊り子いかに群るゝ共、
音頭に手を打つ揃ふとか。

*
*
*
*

逍遙

一

摘むへき花のあらんかと
獨り春野をさまよへば、
希望はもゆる綠草
中にけたかき白菫。

根こぎにせんと腰かゝめ
莖引き見れはこはいかに
根をば離れて花は手に。

あはれは盡きぬ憂き思ひ
せめて心の慰めよ、
ふところに抱いて歸りしが
その夕ぐれにしぼみにき。

二

折るべき花のあらんかと、
獨り夏野にさまよへば
草は繁れる青蓆
中には白き天つ女の
愛の滴(しづく)か百合の花。

手折りて床に眺めんと
心そゞろに寄りそへば
花は靡くかうなづくよ

さどその莖に小さき蛇
纏ふてわれをにらみけり、
妬みの火焔口赤く。

三

もぐべき木の實あらんかと
獨り秋野をさまよひて
林檎林に入りしかな。

戀は熟する紅の色
濃きにうすきに飾る實の
中にかわゆき一つあり。

そのふくらみし愛の頰に
笑みをたゝにてわれ誘ふ。
飯櫃を洗ふ黒川に
桃の實流るを拾はさる、
細腕のべてもぎ見れば
うたてや栗鼠の齒跡あり。

四

飼ふべき鳥のあらんかと
獨り冬野をさまよひて
諸鳥歌ふ森に入る。

雄々しき鶫やさし鶸
息長鳥、四十雀鳴く中に
その白瞼かわゆげの
目白鳥はわれに氣ありげや。

捕らんと楓よづる時
目白鳥うれしく迎ふるよ。
さど定めなの花に風

かわいや目白鳥どこよりか
飛び來し鷹の餌となりぬ。

*　*

蕎麥打ち

寂寥の神領すとう
冬に快樂のなからむや。
小春の日影なよやかに
抱くふところあたゝかや。

自然の惠み今ぞ知る、

*

*

自然の愛子(まなこ)うれしやな。
北風嚴父にたとふれば
冬の日母のめぐみかな。

自然のまこと慈悲の弓。
つかふ細指力あるよ、
尻に密ある光り矢の
きずにたまれる愛(あい)の血よ。

藁屋の南刈りし田の
蕎麥打つ蓆日に濡るゝ
あゝ若き婿(せ)の美(よ)き妹(いも)と

低き話よ息甘き。

婿

蕎麥の青きを我とせば
そにまつはりてそひねせる、
水蓼の莖赤き誰ぞ。
など顏背くあどけなや。

妹

並んで草の床に臥す、
淡き二つの蔭見れは
耻しいかな、母の膝に

嫁入嫌と泣きし身の。

婿

君幼くて敎はりし
さとの一節きかしてむ。
きけ榛の木をとびちがふ
小鳥の歌のらうたしや。

妹

君駒鳥の聲あるも
われに目白鳥の歌あらず。
君草笛に調子とれ

われ鄙歌を試みむ。

婿

樂しからずや田に在りて
落穗拾ひし鳩二つ、
手をとるがごと羽つらぬ。
かの蒼雲の宮に入る。

妹

女心と君笑へ。
鳩の妹婿の春の夢、
覺ます小狐あさましや。

われは願ふよ、暮れぬ日を。

婿

その落ちかゝる櫛とりて
鬢のほつれ毛かきあげよ。
よし山茶花の散らんとも
二つ重なり朽ちばよき。

妹

花ましろくて根も白き
君水仙の香に醉へば
草皆枯るゝ寒き野に

その青き葉の力あり。

婿

瑪瑙花さく空の幕に
光りの女神臥せんとす、
いで蕎麥がらをかたづけて
息(やす)みの家に歸らなむ。

妹

日の脚ものにつぐべくば
この赤襷はづしても
この襦子の帶ほどきても

延ばしたきかな、この一日。

婿

蕪菁味噌汁煮てまてる
母の笑顔を思はずや。
圍爐(いろり)の榾に栗やきて
夜の自然を味はむ。

* * *

溪聲清韻

花に狂ひつ酒に醉ひ、

姫の手をとり嵐峡に、
舟べりたゝき叫ぶとき、
なまめき歌を唄ふとき、
聲あり、我に告ぐるなり。
（松の嵐か、水の音か。）
「汝に一人の母御あり、
汝を思ひつ、故郷に
辛く苦しき世を渡り、
主なき家を治めます。」

四つの袂をみぎひだり
二つ結ひつ欄干（たばしき）に

雨にぬれたる青柳の
池に垂れたる眺めつゝ、
嬉しき言（ことば）を噺すとき、
聲あり、我に告ぐるなり。
（床の達磨や噶しけむ。）
「汝か父上は身まかりつ、
汝か母上は汝か爲に
永き年月春寒き
空しき閨を守ります。」

露を帶ひたる海棠の
梢にかゝる月を愛て、

濡める光に氣はとけて
小鼓とりてたゝくとき、
琴の音につれ袖かへす
姫の姿をほむるとき、
聲あり我に告ぐるなり。
（華頂の鐘の響きかや。）
「萬有は汝の父にして、
自然は汝の母御なり。
汝はみ空の星の花。
きたなき慾にふけりつゝ、
けかれし業に溺れつゝ、
闇の流れの後とむる

下界の人を覺ますべく、
あかるき光送るべく、
佛は汝を產みましぬ」。
痩せたる腕肉なきも、
きたへし骨をたのみにて、
いでや要路の津にたち
民を導き、國治め、
世に敬まはれ、萬世に
名をば得てんとはやるとき、
聲あり、我に告ぐるなり。
（灘行く鷲の叫びかや。）

「汝六合の主にて、
迦毘羅をすつる塵のごと、
頻頗沙羅王の誘ひを
埃(あくた)の如くかへりみぬ、
佛陀は汝の兄にして
汝生靈の司なり」。

智惠なき民に誤られ、
邪智ある鬼にそねまれつ、
希望の日影かくれたる
谷間を獨りたどるとき、
つれなき夜叉にせめられつ、

罪なく死地に沈むとき、
聲あり、我に告くるなり。
(岩に碎くる波の音か。)
「汝は闇世の光にて、
父よ汝に我魂を
授くと云ひて身を終へし
イエスは汝の友にして、
パリサイ、サドカイ導きつ、
北にめぐれ=と敎へたる、
けたかき慈悲を汝が身に
神吹き入れぬ、眞實もて」。

戀路の岩の蔦蘿
悟りの山をわけ進む
足に結びてとけぬとき、
譽求むる草茨
菩提の峯にのぼりゆく
脛に血しほを染むるとき、
聲あり、我に告ぐるなり。
（鞘を離るゝ太刀の音か。）
「汝は造化の將にして、
コーラン讀みつ劍とりつ
＝戰ひ死せば神の手に
抱かるべし＝と敎へつゝ、

惡の羅刹を從へし
メッカの聖は汝かための
軍師ところは聞にけれ。
降魔の劍は汝か手に」。

良香にうもれ美味に飽き
苦しき谷に急ぐとき、
あつきねむりの風吹きて
つとめ怠り遂げぬとき、
悟りの空を翔くるべき、
心の駒の足とむる
ぼだしの綱のなか〳〵に

横木離れず悶ふとき、
聲あり、我に告ぐるなり。
（花にさゝやく蜂の音か。）
「汝は眞如のふところに
光りの乳房ふくむ身ぞ。
波の底まで海行かば、
雲の上まで、山行かば、
かよわき汝の側近く
強き力の守ります。
野山に走りて榮華をも
開くべかりし位すて、
墨染衣身に纏ひ、

吉水の音に眼を開き
とはにたにせぬ喜びを
胸にたゝへて安らけく
无漏にかへりし親鸞は
汝が心の源よ。
汝は佛の子なりけり」。

*　*

小春の村

冬は來れり、息らひの
つどゐの神を迎へんと、

背戸の寒菊着飾るよ、
庭の山茶花紅さすよ。
紫の愛、雀子を
招く榊の實の甘や。

小春日和にほろ酔ひて
目白鳥の歌の面白や。

枯枝に殘る澁柿の
赤き姿に慕はるゝ
鴉の羽の光澤よしや。

落葉を覆ふてあたゝかく
寒がる魚をふところに
抱く里川水清や。

榾の火いぶる圍爐端
小供に交り猿蟹の
合戰語る趣きや。
その甲ばりし笑ひ聲、
栗興がりて舞はんとす。

壁洩る風の寒き土間、
草鞋造りつ若者の

戀物語るあたゝかや、
隅に恥らふ少女子よ、
その紅の頬を吸はさずや。

豆がら歌ふ臺所
葡萄の色に似たる茶の
澁味に醉ふて嬉しげに
佛の慈悲を語りあふ、
媼の顔に春あれや。

*　*

*

*

右手には

右手には細き
　腰いだき
きょき黄菊の
　香に飽かむ。

左手に星を
　指さして
自然の光
　歌はなむ。

*　*

*

*

釘の音

草木眠れる丑の時
セータンの息か腥き
木枯荒るゝ谷道を
露だに厭ふ少女子が
裳を亂して足早む。

妹婿の契り堅めてし
赤きにしの戀の繩
男心の秋風に
憂へとなりて結ぼほれ、

嫉妬となりて物凄く
髪は亂れて顏青し。

心に積る戀の眞木
怨みの熱を受くる時
怒となりて燃えあかり、
胸の板骨燒き盡し
頭の髪を焦すべく
額に青き焰火あり。

昔グリースのキユピットの
張りたる弓に比ぶべき

イエスキリストの魔に打ちし
サンダーボールに劣らさる
強き力の戀の釘
狂へる腕にひつさけて
進むゆくてに恐れなし。

古き祠の横にして
注連を張りたる大杉や、
嫉妬の眼恐ろしく
女人形の頸を刺し
から〳〵〳〵とうち笑ひ、
男人形の胸を打ち

呪ひの言葉果てぬれは
赤き涙を流しつゝ
身を地に投けて泣きまろぶ。

あゝ戀故に少女子は
惡魔の如く呪ひけう、
羅刹の如く狂ひけり、
され共彼に涙あり、
赤き血しほの泉あり。

少女が命捧けたる
情(こゝろ)のまことあざ笑ひ、

戀の焔火に水かけし
かのみやび男を比ふれば
魔にも鬼にも劣りけり。
彼は血のなき氷なり
彼は骨なき海鼠なり。

あゝ夜はいやに更け行きて
血にあきたいと木兎は鳴き
枯木の枝に星寒き
鎮守の杜に杉黑み、
釘うつ音のかん高く
石の鳥居に響くなり。

* *

宿屋の娘

ふくれて白き腕のべて
我に飯盛る小娘よ。
何に耻らふうつむきか、
膝進ませて顏あげよ。

延びて揃へる髮の光澤
蝶々の根がけ珊瑚見き、
やよ富士額少しあげ

*

*

その二かわの瞼より
愛の光りを送らずや。

我れむくつけき鬚男
さど花めづる情あり、
その薄紅の口あけて
笑くぼの因縁語らずや。

野に咲く百合の一莖を
手折るつゝしむ我希望
など柔腕に口接けむ
やさしき聲をきかば足る。

酒は無性と斷はるか
さば盃はさゝざらむ、
願ふ戀路の神禁ちか、
誰と定めぬおぼろなる
幻追へる若き身の
愛の血もゆる心臓に
酒、毒とてのたしなみか。

往さきるさの客の中
かわゆき人の早立に
胸痛めたる朝あらむ、
さもなき人にからかはれ

飯もらざりし夜もあらむ。

問へど小娘白き歯を
秘めて静に笑ふのみ、
蝶に訪はれて野の菫
たゞうなづくか如くにて。

熟してもろくはじくべき
鳳仙花の實君見ずや。
物皆可笑し少娘よ、
香のある薔薇に觸るゝ時
そが細指に傷なせそ。

* * * *

西の京の友に

雁鳴きわたる江戸の冬
鶴きく君か家思ふ。

京の紅葉を色つけし
ハンケチ嬉し君が手よ。

山茶花咲ける庭の夕(くれ)
君を思ひて我ろゞろ。

親しき友と語る時
君か面かげ我見るよ。

慈悲說く經を誦する時
君が言の葉われきくよ。

少女子を詩に歌ふとき
君か幻われ追ふよ。

けたかき像にぬかつくを
若し夫れ戀と云ふべくば。

さど君思ふわが心
戀とはあまり汚れたる哉。

* * * *

死の神來れ

枯れたる黃葉に吹く野分
活ける青葉を落す世に
若者何ぞ死を忘る。

吹雪の道を過ぎすして
到らんや春の花の園、

思へ若者落つる葉を。

死の問題は常住の
生命の門を開く鑰
落葉觀じて雲に入れ。

死の女神これ如來身。
われ導きの柔腕よ、
その花の顏笑あれや。

稻實らずは刈らざらむ
われに死の神未た來ず

信仰のもみ熟せずか。

*　*　*　*

金陵に在る舜水に寄す

舜水書を寄せて故郷も、友人もわれを海外輸出品と心得ると云ひ、慷慨の言數百、われ讀むこと數回、情激し、感起り、口動き、筆走り詩成る。

城趾草枯れて金陵寒く月冴ゆる、
南朝四百八十寺多少の樓臺今いづこ。
名のみ殘りし石頭を渡る雁が音何を鳴く、
こゝに客あり文に長け熱血特に多き性、

三萬里の地狹しとて四千萬の國小しとて、
東山の萩目もやらず大陸の地に渡りしか。
天下經綸の策もちて徒らに茅屋に住む二年、
泣いてくらせし日もあらむ怒りて明けし夜もあらむ。
あゝ楊子江一萬里盡きぬ恨の涙川、
君子の心徒らに南京虫に痩せんとす。

兀たる日枝の峯の上黑雲去らぬ嵐の日、
寂たる京に雪ふりて犬の遠吠凄き夜、
恨みは冴ゆる加茂川の千鳥の鳴く音君知らむ。
事の成らぬに君怒り策のあらぬを我喞つ。
三寸の舌動け共啞の國民夢覺めず。

あゝ君海波隔つれど寒さは同じ冬の宵、
筆を握りて君を憶ひ空しく望む西の天。

今日海岸の港割き明日金壙の山讓る、
國民四億徒らに亡國の谷に急ぐなり。
大厦は將さに覆へる支へん者はあはれたれ、
あゝ君、君はみ佛の心習ひて渡りけり。
隣火を見るに堪えずして煙に君は身を投げぬ。

難をば難と知りつゝも重任帶びて君行きぬ。
かの文盲の民はなど君が功勳を悟るべき。
俗の眼に寫らざる君が心ぞ大なる。

されば共君よ玄々の多きが中に君を知る
人なからめや君が身を祈る者あり知るや否。
君が心に耻らひつ君が勤めに勵まされ
大道たどる一人あり芭蕉枯れたる狹き庭。

君が捨てたる我民の迷ひは今に覺めやらず、
醉ひはます〳〵増け草枯れんとすらむ恨かな。
政客權を弄ひ大法纒す律の繩。
劍はらひて佞人の首切らんとせしいくそたび、
この苦みを知る者は君ならなくて誰あらむ。

あゝ月去りて月來り今年は去年と變りしも、

天下の民は徒らに罪の洞にと急きゆく。
無明煩惱繁くして無學は彼の性なるか。
愛憎違順角たつる妄念彼が質なるか。
あゝ混沌の昔より永却盡きぬ未來まで
君よ我等は潔く强き軍を挑まなむ。
彼等に勝ちて凱施の平和の喊をあぐる時、
君は宇宙の父なれや我は萬有の母なれや。
クリスト死して彼に勝ち佛陀は活きて彼服す。

マセドンの將名も高きアレキサンダの功勳より
我寧ろ取るワシントン自由の國をたてたりし。
全歐の民悉く怕ちしナポンオンの譽より

我習はんとす クロムエル正義の旗を翻しけり。
ワシントン又クロムエル慕はざるにはあらされと
我は期すなり親鸞をルーテルたらん望みかな。
天下に國を建てんよりそが力をば與へんか。
我は正義の人のため光となりて導かむ。

正義の道は唯一つ一つの道を辿り行く
人皆友よ玄々を何時か正義に靡かさむ。
あゝ友泣くな恨まされ出陣に涙不吉なり。
我亡びなば君代り君敗れなは我代り、
生々世々に身を更へて魔をば淨土に連れ行かむ。
あゝ君起てよいざさらば劒とりしか銃いかに。

* * *

我と我が歌

泥に生れて泥に消ぬ
蓮の根に似し我身かや
闇より出てゝ闇に行く。

池の面にふるぬく雨に
自然が咲かす蓮の花
それに我歌似るや否、

* * *

秋の日

秋日ゆかしやけたかくも
榮に實りて黄ばみたる
稻を守りてたのしむよ。

秋日うれしやきよらかに
刈り殘されてれとろへの
白穗はぐゝみいたわるよ。

*　*

*

*

草の生命

醉へるか如き春日影
慈悲あたゝかきふところに
眠る綠の野の千草
希望(のぞみ)の夢にほゝゑみぬ。

天女の愛を雲に鳴く
雲雀の聲にあこがれて
草を離れて舞ふ蝶は
眠れる草の生命かな。

*　*

*

*

旅の一夜

風に吹かるゝ玉霰
板戸を打ちてたばしるよ、
隣坐敷に旅人の
歯ぎりする音きこゆるよ。

一番鶏は既にうたひ、
二番鶏鳴く旅の夜を、
詩のいたつきに眠られぬ、
我に自然の聲降る。

酒飲む友はすや〳〵と
无想をたどる枕元、
暗き行灯かきたてゝ
詩筆天與に任すかな。

對ふはたのが黒き影、
笑ふがごとく泣くかこと
何つぶやくかこの夜更け、
狂者と人の聞くらんよ。

*　*

*

親鸞聖人の誕生

一

門地と云ふか何かそは
高位高官何かそは
紫禁青宮の政
塵掃く業に似たらずや。

民の生血を集め來て
帝王の冠に玉をそに
良相と云はれ何かせむ、
期する所は國ならず。

撫民と云ふか、そは何ぞ、
富國と云ふか、そは何ぞ、
貪慾心のまぼろしよ。
思ふ所は靈にあり。

人に行く道そは何か、
人を逃れて佛となる
まことの法を傳へんと
光明の聖人世に出でぬ。

二

紫の衣そは何か、

錦襴の袈裟そは何か、
僧都僧正そは何か、
座主よ阿闍梨よそは何か。

晝講堂に經を誦し
夜半念者に戯むるゝ
僞善の法師廟堂に
病祈りて敬はれ、

心にもなき觀心を
れのが凡智にはからひて
あらぬ理をこね帝王の

師と尊まれ何かせむ。

无戒名字の一比丘よ
愚禿と自ら名乘りつゝ
雪の夕ぐれ雨の朝
七寸の鞋やるゝまで。

墨の衣に墨の袈裟
榾(はた)たける横賤の男に
佛の慈悲を語らんと
光明(ひかり)の聖人世に出でぬ。

三

薔薇の花を折らんとて
棘に手をさくわれらなり、
名利の心にまよひつゝ。

水面に浮ぶ月影を
取らんと淵に溺るゝは
愛慾に惑ふわれらなり

罪を犯して知らざりし
われらに罪を示しつゝ
罪をば知りて去り得ざる

われらに安慰（かくさめ）與へつゝ

暗夜に光る空の星
雪に色ます寒椿
「罪障功德の體となる」
深きめぐみを敎へけり。

罪に泣くとよそは何か、
「煩惱に眼さへられて
攝取の光明見ざれども」
大悲は常に世をまもる。

愚を嘆すとよそは何か、
「无明長夜の灯炬なり
智眼くらしと悲むな」
月の照さぬ里やある。

「无明の大夜を憐みて
法身の光輪きはもなく」
櫻の雲に身は輕く
聖人親鸞世に出でぬ。

*　*　*　*

歌はつかしき

一夜そゞろの旅の宿、
白に紅重ねたる
布團に獨り寐し詩人
わりなき唯鳩の戀思ふ。

この夜自然が賜はりし
詩皆戀の色帶ひぬ。
曉像に額つきて
我わが詩を耻つらんよ。

*　*　*　*

詩人

磯行く海士の足跡に
泡たつ潮の溜るごと、
詩人の歩む砂原に
愛の泉の湧けるかな。

汽車かけり行く野の末に
白き煙の殘るごと
詩人の思とぶ空に
ケラフ、ヘラフの舞へるかな。

飴賣踊る四辻に
市の童子群るゝごと、
詩人笛吹く草の舍に
羽ある少女集ふかな。

聖人たどる道の邊に
訓への草の萠ゆるごと、
詩人ふみゆく泥の上に
なさけの花の匂ふかな。

日の過くところあたゝかき
光の乳を注くごと

詩人旅する野に山に
惠みの甘露降るかな。

＊　＊

友情

（エマーソン氏による）

雄々しき血の赤き滴り
荒るゝ海何ぞ勝らむ、
變る世は行き又來る
止まるよ有心者根あるごと。

時に思ふ彼去れりと
されど多くの年の後
盡きぬなさけはきらめけり、
のぼる朝日のそれに似て。

沈める心開かれぬ。
わが胸云へり、あゝ友よ、
汝ありて蒼空まるく
汝ありて薔薇は赤く、
汝ありて總てとほとし。
見ずや地の上汝ありて
人の運命の渡る綱、

日の行く道にさも似たり。

貴き姿われにのぞむ、
失望の雲晴れざらむや。
わが生活の隱れ沼は
天色光るよ、汝がなさけに。

*　*　*　*

冬の夜天王寺の墓地をさまよひて

自ら負ひし傷いたみ、
床に眠るに堪えやらて、

ふと思ひ出の氣はそゞろ、
ねまきの儘よ我狂ふ。

世に寂寞の幕たれて
折々梟凄く鳴き、
星たゞ冴ゆる眞夜中の
墓場を獨りさまよふよ。

上野の鐘は三つなりて
餘音淋しく消ゆるとき
落葉騷ぐよ我横に
野犬鼬鼠を追ふけはい。

杉の木繁る闇の路、
腕拱いて暫し行き、
苔なめらなる墓石に
寄りて眼を閉つ物思ひ。

叶はぬ戀を泣き〳〵て
失せしを痛むまだ幸よ、
この氣やさしと叶ふ戀
憂うる我よ、胸痛や。

秀才の希望空しくて
墓に行く泣くまだ幸よ。

世人欺く才あるを
悲む我よ、心臓裂く。

誘ひの鬼に負けがちの
弱き我身を嘆じつゝ
額に手をあて我泣けば
燃ゆる涙の煩つたふよ。

たゞ何となく苦しさに
高く叫べば巣に眠る
鴉驚き羽ばたきし
鳴けるに我もおのゝきぬ。

自ら思ふ恐ろしき
罪の牙持つ我身かな。
氣は清冽の風吹けば
たゞ何となく身振ふよ。

心ゆくほど泣き泣きて
あつき涙のかれし時
杉洩る星の身にしみて
心の汚れ洗はれぬ。

墓石抱き冷たさの
骨にこたえてすくむ時、

頭輕けく氣は活きて
力ある息天に吹く。

*　*

*
*

若き姉妹に

一

若き姉妹の老父に事ふる家に佛を語りて、夜を更しける朝、よみて贈る歌。

世に紫の幕たるゝ
霞の裳に、われ、たちて
春の御親の名を呼べば、

花の香こむる風吹くよ。

若草萠ゆる畦の上に、
われ、聲高に、經誦せば、
菫やさしくうなづくよ、
横に蒲公英ほゝえむよ。

われ、菜の花の香に醉ひて、
その蕊甘き慈悲歌ひ、
野の日暮るゝを忘れしよ、
光明のみ手にいだかれて。

薊にわれを譬ふれば、
葉の刺あるは我か性か。
されどろの上に咲く花の、
紫、慈悲の色とかや。

花なき草を訪ふ蝶の、
心、うれしく思はずや。
我等汚れの胸に來て、
宿る御親を仰がずや。

枝にちらうたき櫻花、
手折るを思ふわがけがれ。

君あさましとわざ笑へ、
されど救ひの乳甘や。

光明の親のふところに、
乳房をさぐるあまへ歌、
ともに抱かるゝ君きかば、
未だあどけなとほゝゑまむ。

二

過ぎし日詩を贈りし姉妹より、毎日二人して五六回づゝ誦して、今は始ど暗記せりと云ひよこしける嬉しさに。

麥の莖吹く牧童の

歌、徒らに野に消ゆる
松の葉に鳴る風の音、
何ぞ妙手の譜を得んや。

人に望まぬ我心
歌ふ詩、何ぞ世に合はむ。
元よりわが詩、鄙びたり。
何ぞピヤノの音に和せむ。

されど惠みのありがたや。
わが髪撫つる手をたれぬ。
獨り野の夕歌ふ時

うなづく星のうれしやな。

霞める野邊にさすらひて、
われたゞひとり笛吹けば、
はるか林に鶯の
やさしき歌を合はすかな。

草に消ゆなむ我詩かや。
星のみきける我詩かや。
世の人はめぬ、氣とせざる、
我そゞろなりや、君誦すと。

水に流して足んぬべき、
詩稿をとるよ細き指。
やさしき聲に歌ふとか
若き血もゆる唇よ。

*　*　*

我に罪惡の自覺なし何ぞ佛の救濟を求めんやと云へる人に贈る

梅はけだかき
花なるよ、
されど北風

肌さむや。

櫻は弱き
花なるよ、
されど春雨
あたゝかや。

*　*　*

野鼠に與ふる歌

野鼠何に驚きて
大根の畑に隱るゝや。

今年豐年田に落つる
穗は汝が爲めの與はりぞ。

畔の榛の木株の下
蕊あたゝかの巢に行きて
毛のなき愛兒抱くとてか。

あゝ畦の上の蕎麥一穗、
銜へて歸れ甘き乳に
かわゆき泣き音汝を待つ
小さき愛兒をはぐくめよ。

時に百性吝嗇の
鋭き鍬に巣破られ、
時に野の猫貪慾の、
爪に愛兒を狙はるゝ
汝世疑ひ、我恐る
理なきにあらざるよ。

汝と我とは自然の
慈悲のふどこにそだつ身ぞ、
さば同胞の何恨み
汝そこなはん氣息めよ。
そのやさしげの瞳あげ

天照る光りおがみ見よ。
愛あたゝかき光り矢は
汝に醍醐を射贈るよ。

*　*　*

常住の光

きはみなびく
　かぜのひる
そらにうごかぬ
　くもをみき。

くもみなはしる
　あれのよい
てんにうごかぬ
　つきをみき。

つきさいほうに
　めぐるあさ
きたにうごかぬ
　ほしをみき。

ものみなうごき
　ときめぐる

よにじやうじゆうの
　ひかりみき。

＊　＊　＊　＊

詩のわづらひ

財のなげ槍恐れてか、
智識の火焔（ほむら）嫌ひてか、
人皆眠る眞夜中を
詩神降るよ我胸に。」

詩のわづらひに寐ぬ二十日

飯は妙利かむ味はひよ。
鏡に顔の蒼さめて
筆持つ指の細るかな。

暗き林にさすらひて
葉かげに星を見る時に
はからず口に歌乗るよ、
あゝ夜は詩神の領す世か。

闇を善ぶ魔に以たる
詩神悶えの砂道に
草鞋の跡を印すかな

ろこにたまれる水は詩か。

戀とう戀のあらぬ身に
われわが悶えいぶかるよ。
されど思ひぬこの悶え
又詩の神のさゝやきか。

一夜詩神の矢に射られ
傷(きず)癒えかねし我身かな。
頭重たく齒はいたむ
されど唇詩に動く。

われわが下にわれを見て
悶えを晒ふ詩は成りぬ。
われわが胸に光明見て
喜び歌ふ詩あるかな。

われこのごろのわれを見て、
獨り疑ふ詩の神に
この肉團を棒けしか
人の世忘れ詩に狂ふ。

*
*
*

自然

惡人に善人の德を求め
善人は惡人の罪なきをほこる
人の心の狹きかな。

大根に人參の赤き求めず
人參に大根の白き迫らず
牛蒡にその黑きをたゝに
蕪菜にその靑きをほむ
自然の心寬きかな。

愚なるは智者の智を恐れ
智あるは愚者の愚を哂ふ
人の心の狹きかな。

鶴に孔雀の尾を求めず
孔雀に鶴の足を迫らず
鷺にその羽白きをたゝに
鴉にろの羽黑きをほむ
自然の心寛きかな。

貧者は富者の財を羨み
富者は貧者の財なきを蔑る

人の心の狹きかな。

松に楓の紅葉求めず
楓に松の常盤迫らず
桐の乘にろの大なるをたゝに
杉の葉にその細きをほむ
自然の心寛きかな。

平民貴族の華なるをのゞみ
貴族平民の撲なるを賤む
人の心の狹きかな。

夏には冬の寒きを求めず
冬には夏の暑きを迫らず
春にその駘蕩をたゝに
秋にその幽邃をほむ
自然の心寛きかな。

ラッフエル元信の繪を望み
カナン、北齋の筆を見んと
徒らにもがく人あはれ。

聊も隱す處なく萬人に開かるゝ
天の畫禎に畫かれし

紫の雲、赤き雲
瑪瑙と光り珊瑚と輝く
自然の繪の妙に觸れて見よ。

れのが手箱に玉と藏め
れのが指輪に金剛珠を
ちりばめんとて苦む人あはれ。

梅に櫻の艶麗求めず
櫻に梅の氣骨迫らず
菫にその紫をたゝに
菜の花にろの黃なるをほむ

自然の心寛きかな。

弱者は強者の強きにねぢ
強者は弱者の弱笑ふ
人の心の狹きかな。

象には犀の角を求めず
犀には象の鼻を迫らず
馬にその神速をたゝに
牛にその緩漫をほむ
自然の心寛きかな。

能なき者は能ある者の能を求め
能ある者は無能者の無能嘲る
人の心の狹きかな。

萬人悉く得らるべき自然の富
かの天の川にちりしける
眞珠かぞへて歌はずや、
或は銀に或は金に光れる
かの星の寶珠を拾はずや。

親の心を知らす徒らに
もがく世の人救はんとてか、

自然この世に使を送れり。
一は詩人よ情にもろし
一は聖者よ德高し。

詩人一度海邊に逍遙ひ
夕陽の雲に額つきて
岸打ちよする白波に
自然のみ姿拜してより。

計度の鉄にさばられて
差別の牢に入る人に
自由平等の光明照れり。

聖者一度山に籠り
朝暾の前に膝まつきて
松吹く風に自然の
親のみ聲をきゝてより、

愚痴の繫縛にほだされて
疑惑の獄に行く人に
希望と安慰の甘露そゝぐ。

* *

*

*

光明攝取

野末の霧にかゞやく日影
うつりて霓のたなびくことく
無限の光明、とわなる智惠に
無限大慈の御心動き、
うつりて有限の姿を示す。

八萬四千の凡夫のために
八萬四千の光明放ち、
八萬四千のかたちを現して
八萬四千の煩惱退治す。

八萬四千の一一光明

無限の佛の御相（すがた）現じ
そこに八萬四千の光り
その又光明無限の佛。

無限の佛は有限に宿り、
無碍の光明、萬有に光る。

かくて梅あり、櫻あり、
かくて梨子あり、林檎あり、
かくて米あり、小麥あり、
かくて人あり、世界あり。
かくて總てが小さき我を

圍りて守れり、み親の如く、
めぐんで乳房をふくましたまふ。

かくて煩惱ひまなき我の、
妄念やまざる汚れの胸に、
滾々快樂の泉は湧けり、
悠々長し、昌平の春。

かの因陀羅網のかげ、
一一にすべてうつるごと、
無限の光りの佛のみかげ
一つ一つの佛にうつる。

かの武藏野の草の葉に
わかれて月の宿るごと、
わが血に佛の血は流れ、
わが肺、佛の息を吸ひ、
わが足、佛の意に動き、
わが口、佛の慈悲歌ふ。

こゝに繫縛の繩は切れ、
自由の御旗ひらめけり。
こゝに不安の波は去り、
安慰の錨をろされぬ。

*　*　*　*

生命

曉咲いて朝凋む朝顔の花に比ふれば
嵐待つ間もあぢきなき櫻の生命永きかな。

ふりては消ゆる泡雪の泡の命に比ぶれば
百年またで土となる人の一生永かりな。

朝に生れ暮に死ぬ蜉蝣の身にし比ぶれば
夏世に出てゝ秋に果つ蚊の生命(いのち)ころ永かれや。

その嘴は長けれど鶴の千歳を比ふれば

足は短きかの龜の萬歳の生命永きかな。

千歳の生命終る時萬歳の齡果つるとき、
鶴龜何を樂みてかわゆき子らを殘し行く。

かの山鳥の永々し秋の夜明の惜まれて
かの春の日の永きさえ暮は悲き思ひぞや。

かくて思へばわれ人の求めん齡いくつぞや
千歳はみたず萬代も盡きなばいかに憂かるらむ。

こゝに我等の望みをば充さんものと慈悲の親

ことに我等に慰めを與へんものと智惠の主。

かの四十里の盤石の天女の袖に消ゆ時を
その時の數合しても足らぬ生命の御佛や。

この御佛の召によりたよる須臾の時またで
我世に死の文字跡絶えて人に盡きせぬ生命あり。

* * * *

歡喜

春、村過ぎて梅の香の鼻つくあらば君思へ、

その花の上に佛あり、君をよびつゝたちまさむ。

夏、野を行きて白茨の薫れるあらば見よや君、
その花の上に佛あり、君を招きて笑みまさむ。

秋、園あるき菊の香に心すみなばあをげ君、
その花の上に佛あり、君に生命の息吹かむ。

冬、書（ふみ）の部屋水仙の匂ひに醉はゞ歌へ君
その花の上に佛あり、君に快樂の琴彈かむ。

* * * *

盲女の歌

雲、恒星を隠す時
旅人道に迷ふごと、
父、黒幕に入りて後
我か世の道の棘多み。

栗鼠半熟の葡萄とり
その濃紫慕はしや。
貂(てん)まだ青き林檎もぎ
ろの紅の色惜しや。

晴れ着の帯は赤かりき
鏡に薔薇の簪見て
あゝ櫻見に、櫻見に
行きしろの春なつかしや。

主人なき家衰への
一夏我眼雲に消え
たよりは母よ病あり
按摩習ひしも前業か。

霜に痩せ行くこほろぎは
馬に踏まれて失せしとか

露にえ堪えぬ女郎花
牧者の鎌に果つるとか。

宣ふごとく、或宵は
犬の吠ゆるにおのゝきぬ、
又泥に伏し泣きたりぬ
車夫の腕(かひな)にはねられつ。

町を夜すがらさまよひて
空しく歸る朝の道
學校行きの童(わらはべ)に
石投げらるゝ我身かな。

眞晝の藪に雀子の
梟をなぶる運命(さだめ)かや。
牛に踏まれし土蛆(つちむし)の
蟻に引かるゝこれぞ世か。

落つるをまたて紅葉吹く
風、人咀ふ魔の息か、
朽つるを待たで落葉燒く
人の心の氣强よやな。

藥のかてに事缺きて
心痛めし朝惜しや。

粥をすゝりて病む母と
昔し語りし宵欲しや。

鋏き「時」の劍にふれ
一夜わが杖折れたりぬ。
誰にすがりて行けとてか、
あゝ我が母は世を捨てつ、

天に行きます煙さへ
おがめぬこの身あぢきなや、
一夜墓場の草に泣き
木兎の叫びに驚きぬ。

吹雪に人のたをるれば
そこに雪積む世の常や、
獨り盲者(めくら)と蔑まれ
家借り兼ねしなげきかな。

今年二十五、人に聞く
髪に白毛の交れりと
そもことはりよ過ぎ來せし
わが足跡を向ふな君。

錨は沈む水底に
埋木たらむ我にさへ

浮きたることを云ひ寄りし
男なきにもあらざりき。

寒きは我が運命よと
堅く氷りし胸の血も
かのあたゝかき春風の
愛の言葉に溶けずやは。

花を誘ひし春雨の
花につれなきあじきなや、
石を抱きて血の燃ゆと
思ひし我よ若かりき。

何希望ありて世に生くと
尋ね給ふか、さん候、
寄る邊なぎさの捨小舟
どこに光明(ひかり)の港あらむ。

尖れる砂利を盛りし道を
洗足に走る世に倦んで
いばらの中を行く雉子の
羽(はね)をとらるゝ厭ふ身ぞ。

生命流さむ淵探し
堤迷ひし幾夜ぞも。

魂の緒かけむ枝尋ね
林にゆきし幾日ぞも。

思へば奇しき因縁よ。
死すべく森に急ぐ暮
はからず聞きし鐘の音は
わが導きの御手なりき。

人か、佛か、説くは誰ぞ
見る得ざりしも野の寺の
その法の聲貴かりき、
こゝに甘露の蜜湧きぬ。

親なき我の親となり、
夫なき我の夫となり、
慈悲あたゝかきふところに
抱く佛よ、我が力。

我れ、世の總てを失へり、
されど貴き一つ得つ、
佛の慈悲はとわなれや
凋まぬ花の蜜なれや。

運命(さだめ)の神の手冷たしと
思ひしものをうれしやな

慈悲の血めぐる柔腕に
盲ゐし我を抱き給ふ。

トンネルの風寒かりき、
トンネルの道闇かりき。
過ぎし我身を譬ふれば
このトンネルの旅人よ。

今の我身を譬ふれば
日影浴び行く春の人、
野にさまよへば草笑ひ
森さすらへば鳥歌ふ。

吹雪く夜なゝ更くる町、
行くも樂しき今の身や。
无碍の光明照るところ
快樂の門は開かれぬ。

泡たつ波のふところに
珊瑚の花は咲くとかや。
山に迷へる獵人を
熊の助くるうれし世や。

熱病む人を撫てつゝも
涼風胸に吹き起り

疲れし人をさすりつゝ、
萠え出る草の思ひ湧く。

汚れし小舍に獨り寢の
夢は樂しき瑠璃の床、
「二十五菩薩來化して
音樂哀婉雅亮なり」。

* * * * *

自由、平等

自由を望む世の人よ。

平等を希ふ論客よ。
土を離れて行くを得ぬ
この肉團に自由とよ。
千人よりて千いろなる
この人身に平等よ。
政府を自由の敵と思ひ、
富者を平等の仇と思ふ、
ルーソの徒よ愚なり。

民政を自由の泉と云ふ、
共和論者よ、敢て問ふ、
かくて人、空翔けり得るか、

無限の慾望達せらるべきか。

財の平均を平等の
曙光と思ふ人よ、敢て問ふ、
かくて智識は等しきか、
容貌の美醜滅するか。

砂を煮て飯を得んとする者愚ならば
政躰を變して肉身の自由を得んする者迷へるよ。
氷柱を薪として火を得んとする事惑ならば
共產主義に平等を望む人は狂へるよ。

ゲスセーマネの人の子は
自由を說けり、而も靈の上に。
菩提樹下の大覺は
平等を說けり、而も如(にょ)の上に。
靈は一なり、如は遍滿す、
こゝに自由あり、平等あり。

きけ、自由を瞻望するの人、
思へ、平等を渴仰するの人、
花は紅、柳は綠
夏暑うして、冬寒し、
かくて世に自由あり、又平等あり。

紺を彩る曉の雲、
紫光る暮の雲
美はそれ美なり、天の色。
雲雀なく野に日を浴ひて
蝶と戯むれ董つむ
少女妙なり、地の模様、
かくてゾーマに醉ひつゝも
馬糞に宿る美の神を
見ざる詩人よ、盲ゐたり。

衣やれ、食ふべくもなき人憐れなり、
されど亦高樓に臥して慾に耽ける

世の富める人亦悲しからすや。
世の理を知らぬ人憐れなり、
されど亦、智に縛られて如を知らぬ
智者の我見亦悲しからずや。

貧者は貧のまゝ、富者は富のまゝ、
愚者は愚のまゝ、智者は智のまゝ、
醜は醜のまゝ、美は美のまゝ、
こゝに平等はあり、靈の上。
萬法一如遍法界、
因陀羅網の影これ宇宙。
如來心に入らずして平等を求むるは迷なり。

心を佛地に樹てずして自由を望む者憐れなり。

自由を愛づる人よ、茲に集へ、
靈は生命なり、とわにつきず
平等を喜ぶ人よ、茲に來れ、
如來の國は光明なり。

人生

志すは平和の島自由の家
崎の漁村に日は暮れて
三日月青く、星はきらめく

携へしは手なれぬ重荷。
行くは獨りかよわきわれ。

われ未だ踏まず、平和の島。
何ぞ知らんや、そに至るの道。
村人云へり「この闇き夜
提灯と案内者なくてなど
行くべからんや砂の山
細き板橋岩の坂」。

之にきかず、心かたくな
自ら思ふ方に行く時

闇き風は帽を飛ばし
氣やゝ弱る時黒き影あり
われに先じ行く三つ。

われ

「汝等平和の島に行くならずや
願はくばわれを導け」。

黒き影の一つ

「さなり汝もさなるか
わが知れる道、いざ給へ
道しるべせむ」。

之に力を得しわれの
三人の友と語りつゝ
漁村いつしか過ぎんとし
茲にふさがる砂の山

黒き影の一つ

「こはいかに、道たにぬ」。

黒き影の一つ

「この山越ゆるは常の道
いざ登らなむ」。

砂山のぼる三つのかげ
默してわれも從ひぬ。
されど砂吹く潮の風
吹雪の如く襲ひ來て、
眼(まなこ)はくらみ、息はたに、
進み行かんの力なし。

われ

「こは叶はじよ、すさまじや」。

黑き影の一つ

「いかでこの山越し行かむ」。

黑き影の一つ

「これを越さずば道あらず
力を鼓して行かんかな」。

行けじと云ふ者、行かんと云ふ者
共に退き山をくだり
風を避けたり漁家の軒下。
されどいつまでかくてあらんやと
はげましあひて山に登れば、
風はます〳〵きびしくて
砂はうづまき息とむる。

われ

「吹雪のために道を得ず
凍にて死せし武夫の
運命はかくやありけらし」。

黒き影の一つ

「とても行き得じ」。

黒き影の一つ

「目口ふさがる苦しさよ」。

黒き影の一つ

「この儘砂にうもるゝか」。

云ひ合はさねど影四つ
かくて山をば降りけり。
袖かき合はす軒の下
かたみに喞つ砂の風。

黒き影の一つ

「力の限りなほ試みむ」。

かくて四人はいてたちぬ
砂風いよゝきびしかり、
一足行いて息をつき、

一足行いて目をぬぐひ、
漸く山を越にんとす
下着は汗に濡りつゝ。

砂山を右にめぐるところ、
風は大洋の寒さをあつめ、
身も吹き飛ばされんの思ひ、
遙かの下に波白くうなり、
砂海にくづれて壁の如し、五歩の横。

海に傾く狹き道
歩む時砂はくづれぬ

風はつよくわれに向へり
をのゝきと恐れに身はふるひ
這ふかこと漸く出たり砂の濱。

時に遙に島の灯見ゆ
漸く蘇生の思ひして
砂をけたてゝ歩む内
三人の友を見失ふ、
向ひの黒きかさならんと
行けば舟小舍いふせくも
たをれて砂にうもれたり。

われは叫びて友呼べば
はるかに友のこたえけり
聲する方へたどり行けば。

黒き影の一つ
「しづか君しづか君
君いかゞせしや」。

われ
「あらずわれなり、呼ふは誰ぞ
あなニ人かやなほひとり
何れへ行きしいがゝせしや」。

黒き影の一つ
「いかゝせしかや氣かゝりや」。

黒き影の一つ
「若しやたをれて居らざるか」。

かくて二人はしづか君
しづかと呼ひて元來たる
山の方へとゝもどりけり。

右も波、左も波
踏むも砂、顔吹くも砂

風は轟々たり、波は蓼々たり、
月は飛ふかこと、星は消ゆること
こゝに殘りしわれひとり
ゆくてに橋ありときくのみいつこと知らず、
遙かの沖には折々奇しき光の明滅するを見る。
この時われはすくみぬ、
恐れの神に襲はれて。
われは坐しけり、砂の上。
かくて靜に物思ふ。

海は闇く、物凄く、
白布に風吹くごとき波

今二尺高まり來なば
この濱は水に沈まむ
われ終に魚に食はれむ。
恐ろしや、命の恐れ、恐ろしや、
恐れつゝ見れはや波はいや高く
砂風いよゝ强く吹く
思はるゝかな三陸の海嘯、
獨り子を波にとられて狂へる母、
結婚の其夜溺れし新夫婦。
嘗ては人の身、今はわれ。

われ今こゝに果てなんか、

夫(おつと)に別れ十六年
われ獨り子をたよりとす
母のなげきやいかならん。

新婚わづか十日經て
あかで別れし新妻の
運命の水はわれこゝに
飲まむ水より苦からん。

時に聲あり喝すらく、
「汝か身は常の世の人と
變りし運命持つ身ぞや。

汝は宇宙の司配者の
恵みの御手の使なり。
慈悲の主は汝により
光を世々に顯はさむ
願ひのありと知らざるか」。

「されば汝(なんぢ)恐れざれ
いかに大波荒るゝ共
いかに潮風つよく共
いかでか汝を害し得む」。

「若夫れ汝溺るゝも

そこに淨土はたてられむ。
萬難汝にせまるとも
慈悲の主はその御手に
汝をいだきてかくまふよ。
之を思はで徒らに
嘆き恐るゝ愚かさよ」。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
思はず叫ぶ親の御名、
こゝに恐れの闇は晴れ、
こゝに憂えの綱は切れ、
心しづけく氣はすみつ。

力の水は胸に湧き
にわかに心いさましく
恐れたる波おぢし風
今はおのれの命のまゝ
動くと見えて面白き。

かくて雄々しくたちあがり
ゆるみし帶をしかとしめ、
島のあかりを望みつゝ
橋をたづねて進み行く、
波はますます高うして
風はいよいよ強きかな。

かつ迷ひつゝ漸く到る
橋は細うしていや長く
狹くかけたる板うすし。

右手(ゆん)でカバン、左手(めで)は傘
横に外套を吹く風は
橋よりわれをとらんとし、
下は白濤うづまきて
一足毎に橋動く。

初更未だに夕餉せず、
續く風との戰ひに

疲れはましてのどはかれ、
胸の動悸の高まりて
たふれんとする幾そたび。
この時月は雲を出づ、
危く見ゆる橋の上に
坐して靜かに觀ずれば
清興胸に湧き來る。

思へば人の一生は
今宵の道に似たるかな。
外難しきりに襲ふ時
恐れに力裂けんとし、

漸く佛に力得て
難と戰ひ行く内に
外難去らす内よりも
難は起りて襲ひ來る
實に艱難の多き世や。

されとわれには内外の
万難にたゆる力あり、
佛の御名を呼ふ時に
われに勝つべき仇あらず。

風と戰ひ勞にかち

死のをのゝきを制し得る
利劍はわれに付與されぬ。
進んて至る橋半、
その兩側に欄あらす、
時には板のぬけしあり、
風はいよいよつぼみ吹き、
波荒うして海深く
橋は動けり波の儘。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
御名を力に勇ましく
心靜かに休みつゝ

而も撓ます進むかな。

我等がたどる人生の
行路を見れば今のごと、
恐れてたどる橋の上を
吹きまく風の荒うして
その行く道の橋さへも
波にゆらぐは人生の
それに土臺のなきに似て
悲しき事の極みなり。

されど恐れと悲みの

人の世に出て万難と
戰ふ時に御佛の
御名は無限の力なり。
この御力に救はれて
われ等けなげに世を過きむ。

危き橋上の靜觀に
都の友の知り得ざる
救ひの味と人の生の
力の元とを中心に
感し得し身の幸思ひ
御名を稱へて歩みけり。

たのみの星の折々は
雲に入るごと死を恐れ
疲れに困ずことあれど
闇にきらめく天の火に
似たるは佛の御力や。

かくていつしか奮鬪の
橋を渡りてうれしくも
平和の島につきにけり。
疲れし足にはげみ得て
自由の家に入りし時
喜び何ぞ得堪えんや。

兩手を胸に合しつゝ
感謝のあまり御名よびぬ。
この時思ふ艱難は
實にや愉快の元なれや。
不幸は幸を產む母よ。
されば われらは人生の
艱難不幸にたゆたはで
之を桀りにいや强く
獅子奮迅の勇をもて
平和の國に進まなむ
自由の家に到らなむ。

藍巷の夕陽にうたへる歌

六月の末、我、偶ま、
波亂る津輕の海を越えて、
青嵐めぐる天宮の
山の下なる藍巷に客たり。
巷に立ちて、彼の大空をわたる夕陽の光に對ふ時、
我胸に抑ふれど止まぬ思あり。

君知らずや、藍巷の夕、
この大なる六合は、
たゞ美しさと尊さとに滿たさるゝを。

彼の中空を覆ふ灰色の雲は、
山庵の曉、經を讀む
聖の衣に似たらずや。
彼の天半にとぶ深紅の雲は、
玉殿の夜、花に舞ふ
乙女の袖にもまがはずや。

東には、天上の春、今老ふるらし、
そこにすみれの花の如き雲ほゝえめり。
西には天上の秋、今動くらし、
そこに白蓮の華の如き雲ちり亂る。

ほゝゐむ雲のあたりには
孤雲、羊の如くさまよひぬ。
かばかり尊き妙樂の園に、
彼は何をか尋ぬらむ。

ちり亂る雲の蔽ふ下に、
金雲、横にたなびきぬ。
これ恐くは光明の國に、
我等を導く門にはあらざるか。

榮は溢れぬ、盡十方。
光は滿てり、大千界。

而し而も見よ。その溢るゝ榮の中より、
また新たなる榮の限りなく湧き出るを。
その滿てる光の底より、
また更に尊き光の、窮りなう輝き出づるを。

榮つきず、光、窮まらず。
その榮と、その光とより、
无聲の伽陀は、朗らかに、
彼の九霄の上のその上より、
此大塊のその下まで、
とゞろきわたりて、大千に、
その榮と、この光とをたまはれる

大御心をたゝにたてまつる。

たゝにたてまつる无聲の伽陀、
きよらに空にひゞくをり、
日は沈み、萬軍の
王、嚴かに宮に歸るごと。

いにしへ三千年の前、
佛と聖との膝うめて、
靈鷲の會に亂れ散れる、
彼の曼羅陀の華のごと、
彼の摩河曼陀羅の華のごと

彼の曼殊沙の華のごと、
彼の摩河曼殊沙の華のごと、
かゞやきわたれる夕雲の
中を靜に日は入りぬ。

入りぬる日をや送るらむ、
天上の雲、いよ輝きぬ。
降れる日をや迎ふらむ、
地下にはまた伽陀の音、朗らかに湧く。

かゞやきわたる雲の色に、
湧き起りたる伽陀の音に、

この天と地と、共に燃ゆらむかと怪しまれ、
この天と地と、共にゆらぐかと疑はる。

うらむべきかな、過ぎし我や。
かくまで尊く美しき
榮と光と滿てる世に、
我れ、いたづらに貪りに在りき。
而もいひき、この世は汚れたりと。

悔むべきかな、昨の我や。
かばかり高き讃頌の
伽陀高うひゞきわたる世に、

我れ、いたづらに迷にありき。
而も云ひき、この世は賤しむべしと。
あゝ眼しひたりき、過ぎし我。
あゝ、耳聾せりき、昨の我。

をのれ汚れて、そをしらず、
徒らに世の汚れたるをいひぬ。汚れたりし哉。
身賤しくして、ろをさとらず、
妄に世の賤しむべきをいひぬ。賤しかりしかな。

さるを我、今この巷にありて、
拜したり、この夕べの光を、

仰ぎたり、この夕べの雲を。
われ、この光を見、この雲を仰いで、
われの汚れしを忘れ、われの賤しきを忘れ、
忘るゝをも、また忘れ去りて、
たゞ美しき〳〵光と
たふとき〳〵榮とに醉ひ了むぬ。

くしきかな、このをり、
暗かりし我心に光あり。
苦しかりし我心に樂みあり。
悶えたりし我心に安らかあり。
汚れたる賤しき藍巷の

旅にやつれにしと思ひしわれ、
亦きよらなる尊き光にみたされ、
きよらなる尊き光に埋められぬ。
而してこの時、我まなこに涙ありき。
これ豈悲み、歎き、若くは、恐、憤などの涙ならむや。
たゞ、我胸にあふれ、我胸に漲り、
我小やかなる胸につゝみかねし、
その大なる喜の濤が、我が知らぬ間に、
我が小やかなる臉のせきをうちこわしにあらざらめやは。

左の一篇『藍巷の夕に歌へる歌』は友人多田鼎君が北海道に客たりし時の作也。予はこの氣高き一篇を予が拙き詩集の結尾に副うるの光榮を感謝す。

迷の跡 終

明治三十六年六月一日印刷
明治三十六年六月三日發行

（迷の跡奥付）
（定價金四拾錢）

版權所有

著作者　曉鳥敏
東京市本郷區四丁目五番地

發行者　清水金右衛門
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷者　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三秀舍

發兌元　東京市本郷四丁目　文明堂

賣捌所　京都西六條　興教書院

文明堂出版圖書捌賣所

神田區	東京堂	顯道書院
同	上田屋	法藏館
同	光融館	護法館
同	岡崎屋	法文館
同	勉強堂	貝葉書院
同	日本堂	便利堂
同	中庸堂	吉岡書店
同	有斐閣	松村九兵衛
日本橋區	林平次郎	福音社
同	丸善株式會社	日東館
同	金昌堂	福音館
京橋區	松邑三松堂	川瀨代助
同	目黑書店	一貫堂
同	北隆館	金蘭社
同	警醒社	岡安書店
同	東海堂	西澤喜太郎
同	服部書店	高美書店
同	鴻盟社	學海堂
芝區	佛教館	武內彌三郎
麻布區	森江書店	

京都市西六條	法藏館	廣島市南町
同 東六條	護法館	岡山市大寺町
同 東六條 五條通	法文館	廣島市堺町
同 二條	貝葉書院	福岡市博多
同 三條	便利堂	熊本市新町
大阪市備後町	吉岡書店	鹿兒島市仲町
同 心齋橋	松村九兵衛	越中富山市
同 同	福音社	久留米市
神戶市元町	日東館	甲府市櫻町
同 元町	福音館	日向國宮崎町
名古屋本町	川瀨代助	熊本市南新坪町
同 末廣町	一貫堂	札幌區南一條
靜岡市吳服町	金蘭社	横濱市吉田町
岐阜市岐阜町	岡安書店	横濱市伊勢佐木
長野市大門町	西澤喜太郎	横濱市松ヶ枝町
信州松本町	高美書店	靜岡市七間町
越中守山町	學海堂	名古屋市末廣町
岡山大寺町	武內彌三郎	羽後象潟町

東西堂	奧田金正堂
洗心房	積善館支店
長崎次郎	久永金藏
清明堂	菊竹書店
眞盛堂	坂田靜泉堂
好文堂	富貴堂
有憐堂	勉強堂
弘集堂	石田彌太郎
文光堂	森喜治郎

其他全國各書店

海老名彈正先生編　（菊版三百頁）（大好評第六版）

耶蘇基督傳

上製　價金六拾五錢　郵稅拾錢
並製　賈金五拾五錢　郵稅八錢

今や宗教を求むる聲、天下洽く且つ之を求むるもの唯理論のみを以て滿足せず、直に生命とに接せんと慨むらくは此千古の宗教的天才を傳ふるもの、我邦亦二三單福音書の切拔に止まり、或は主觀的理想の書なきに非ずと雖、或は確なる叙述を。本書は耶蘇基督の猶太國に生れたる歷史的考察に基つく正人物として主として其時勢と周圍との關係に於ける活動を描けるものにして井上博士の一個歷史上の尼傳と相俟ちて我讀書界多年の渴望を滿たすもの謹て江湖の一閱を祈る釋迦牟

發兌元　東京市本郷區四丁目五番地　文明堂

浩々洞編著

佛教の信仰

清澤滿之　佐々木月樵
敏鼎　鳥田曉多
（合著）

佛教の經典。六千卷、本書は其要文を採り、從來の解釋以上、一歩を進めて、明に且弱く其**眞精神**を發揮せり、求道の士。これによりて三千年前の古典が、如何に**清新強健**なる**實踐的大義**を合著指示せるかを觀よ、著者は此小冊子を**現代及將來**の道友に捧ぐるを以て**非常**の光と感ずるものなり

（著者白）

文明堂發兌

浩々洞編著

春の頌

（再版出來）　價三十錢郵稅四錢

發兌元　東京市本郷四丁目　文明堂

清澤滿之、多田鼎、佐々木月樵、曉烏敏の著也。

春の頌は、宗教なり。故に、煩悶者に平和を敎ゆ。
春の頌は、哲學なり。故に、求道者に眞理を示す。
春の頌は、詩歌なり。故に、憂鬱者に慰籍を與ふ。
春の頌は、科學なり。故に、宇宙の事物を達觀す。

精神講話　再版　價金四冊　郵稅四錢
吾人の宗教　再版　價金廿五錢　郵稅四錢
信仰の餘瀝　三版　價金十五錢　郵稅二錢
心靈夜話　新刊　價金二十錢　郵稅四錢
佛教の信仰　新刊　價金四冊　郵稅四錢

文學博士　井上哲次郎先生著　（菊版三百頁）（好評嘖々第八版）

釋迦牟尼傳

上製　價金八拾錢　郵税拾貳錢
並製　價金六拾錢　郵税金八錢

釋迦の史傳として、從來我國に行はるゝもの、其類少しとせざれども皆大抵小說的のものに非ずんば空想的のもの、學者の一顧に價ひするもの殆ど稀なり、博士茲に感あんが爲め正確の材料を討ぬ多年研究の結果終に此篇となる、其內容の如何は絮說を要せず、只一言此書の特徵を附記すれば博く歐米學者の釋迦に關する、評傳たる事と孔子、基督、マホメット等を併せて比較評論したる事と及び釋迦の史傳並に佛教を學ぶもの、爲めに精細に其材料と其研究法とを示したるにあり伏して識者の一覽を待つ

發行所　東京市本郷四丁目　文明堂

トルストイ伯著　加藤直士先生著　（大好評第三版出來）

我宗教

トルストイ伯肖像
菊版三百三十頁
定價七拾五錢
郵税金拾錢

露國先帝亞歷第三世此の書の原稿を閲し一日伯を召して曰く朕甚だ卿の說に服す唯夫幸に非戰論其他の二除せよと。ト翁毅然として一頁を沒す可くんば寧ろ三頁を答へて曰く臣若し此書の全卷を燒かんのみ、否之を書ける臣の雙腕を斷つあるのみ、陛下幸に之を察せよと。此書や實に翁の生命也眞髓也骨子也。尤然たる翁が無數の著述は一に此書の主旨を布演する者のみ。翁が人生觀宗教觀社會觀の實行主義禁慾主義文明論非戰論等活如として卷中に踊る。眞に是れ翁が心血を披瀝せるの名著也、今や翁が我懺悔の譯者によりて邦語に譯述せらる、若夫此書にして眞に讀まれんか啻に我國の宗教界のみならず一般の思想界は爲めに其根底より顚覆せらる可き也。苟くもト翁の眞相を捉へんと欲するの士人生の大悟に達せんと欲するの士競ふて愛讀の榮を賜へ

發行所　東京本郷四丁目五番地　文明堂

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひその將來の宗教に關する意見を叩いて茲に此の書を公にす

新佛教徒同志會編輯

將來之宗教

記大家肖像入筆跡入 菜版三百五十頁 定價七拾錢 郵稅金拾錢

釋雲照氏　元良勇次郎氏　大内青巒氏　清澤滿之氏
海老名彈正氏　南條文雄氏　坪内雄藏氏　前田慧雲氏
渡邊南隱氏　澤柳政太郎氏　島田三郎氏　川合清丸氏
加藤弘之氏　大道長安氏　井上哲次郎氏　片山國嘉氏
佐治實然氏　井上圓了氏　村上專精氏　江原素六氏
内村鑑三氏　巖本善治氏　德富猪一郎氏　中島力造氏
浮田和民氏　田中智學氏　釋宗演氏　島地默雷氏
小崎弘道氏　黑田眞洞氏　本多庸一氏　植村正久氏

我徒は自由を尊重す乃强ひて同一典型の下に人を律するに忍びず敢て各種の信仰を開展し普く大方の撰擇に任ず

發賣元　東京本郷四丁目　文明堂

侯爵山縣伯有朋君題字
伯爵松方伯正義君肖像　男爵園田安賢君序文
安田善次郎君序文　金森通倫著

貯金のすゝめ

改版大增補
三百餘頁
四號かなつき
定價廿八錢
郵稅六錢

本書は北海道廳。奈良縣廳。熊本縣廳。宮城縣廳を初めとして全國の諸官省、諸會社、銀行より五千一萬部等の御買上を蒙りたるは、實に著者と弊店の光榮とする所なり之によりて如何に本書が世の部多きはするやを知るを得べく、今後更らに數萬の版を重ねて聊か邦家將來の爲めに貢献する所あらんことを期す

時弊に適

ベークマン原著　文明堂編輯部飜譯（再版出來）（原書第十六版）

强肺術

紙數二百頁　價郵三十四錢
寫眞銅版數個
木版十數個挿入

肺病を恐るゝ者は讀め　肺病に罹れる者は讀め　歐米に於けるこの最新式体力養成法を讀め

南條、井上、村上、三博士述
◎佛教講演集　再版　價廿錢　稅四錢

横井見明師編
◎村上博士講演　再版　價廿五錢　稅四錢

濱口惠璋師著
◎心靈上の修養　新刊　價廿五錢　稅四錢

濱口惠璋師著
◎古英雄と宗教　三版　價廿錢　稅四錢

靜泉龍潤師著
◎佛教歷史問答　新刊　價四十錢　稅六錢

前慧雲師著
◎本願寺派學事史　新刊　價廿五錢　稅四錢

花田凌雲師著
◎佛教倫理概論　再版　價四十錢　稅八錢

清澤滿之先生著
◎精神講話　再版　價廿錢　稅四錢

曉烏敏先生著
◎吾人の宗教　再版　價廿錢　稅四錢

近角常觀先生著
◎信仰の餘瀝　三版　價十五錢　稅貳錢

文學博士井上哲次郎先生著
◎釋迦牟尼傳　四版　並　價六十錢　稅八錢

海老名彈正先生編
◎耶蘇基督傳　三版　並　價五十五錢　稅八錢

前田慧雲師著
◎略述眞宗教史　再版　價六十五錢　稅八錢

渡邊宗全先生著
◎佛教各宗原理通論　新刊　價廿五錢　稅四錢

清澤滿之先生外
◎佛教の眞精神　再版　價廿錢　稅四錢

井上圓了先生著
◎靈魂不滅論　三版　價廿錢　稅四錢

清澤滿之先生著
◎靈界の偉人　再版　價廿五錢　稅四錢

花田凌雲師著
◎佛教倫理の實踐　再版　價廿五錢　稅四錢

浩々洞編纂
◎佛教の信仰　新版　價廿錢　稅四錢

井上耕丸君著
◎詩人親鸞　再版　價廿錢　稅四錢